

福竜丸だより

都立・第五福竜丸展示館ニュース



発行 第五福竜丸平和協会
〒136 東京都江東区 夢の島3-2
都立第五福竜丸展示館内
電話 03-3521-8494

戦争を知らない息子が六年前、「一度切りの人生だから」と励まされ、日本生協連等の「市民平和行進」に、県下初の通し行進者となり、一九九一年十月十日、東京・夢の島の第五福竜丸展示館前をスタート、八十四日間「子どもたちの未来に平和な社会を」と原水爆禁止世界大会の成功をめざして行進した。

道中、五十三日目の七月三日、大阪岸和田市役所前で、「八月の広島・長崎をめざし歩き続け、和歌山に帰ってからも平和運動に取り組みたい」と挨拶した。

身内の者がその時渡したメモが今も我が家の記録に残されている。

「背中で『東京どっち』といったら『こっち』、『大阪どっち』といったら『こっち』と指していたあなたが、東京―大阪―広島―長崎―と命をかけて平和を守る使者として毎日活躍されているのには感動しています。いままねお病床で苦しんでいる被爆者のためにも一歩一歩はことばよりも尊い行いです。八月の空にむかってがんばって下さい。和歌山から応援しています」

この後、我が家ではいままでも以上に核廃絶の運動にとりくむようになった。

縁は異なるもの味なもの、息子は、滋賀県の女性通し行進者と結婚することになり、静岡県の三・一ピキニデー実行委員会の谷中敦さんが仲人として、和歌山県に挨拶に

エンジンを船体のそばに運びたい

杉 末 廣

こられた。氏は和歌浦湾を見るなり開口一番、「和歌山は良いところだ、第五福竜丸の建造の地だ」。一九九二年二月のことだった。

恥かしながら、アメリカの水爆実験で「死の灰」を浴びた第五福竜丸事件は知ってはいたが、それまで建造地が地元和歌山県とは知らなかった。

この知識の遅れを取り戻そうと書物や各方面に資料収集、聞き取り調査をはじめた。地元役場には資料はない。船体は東京夢の島に、エンジンは別の船で使われ三重県の御浜沖に沈んでいる…。

何故、心臓部というべきエンジンを、二十八年間も引き揚げないのか。海底で魚や貝を抱きかかえているのは何の訴えも出さず老化してしまう。沈んでいる場所は船体に使われた松を切りだした場所からすぐそこである。

船の設計者南藤藤夫さんは、一九八九年六月に現地を訪れ、熊野灘に向って、この沖に沈んでいる、と指で示し、浜辺で別れの酒をまいた。そんなことも聞き取り調査で判明した。

その南藤さんも、昨年十一月三日、エンジンを見ずにこの世を去った。

十七日後の十一月二十日、ついにエンジンを発見した。南藤さんが別れの酒なら、こちらは一日も早く迎えにくるからと、

発見位置にむかって涙を流しながら酒をまいた。花は散っても実のなる「梅輪」という酒だった。

この地方熊野は、死者の霊のこもる地といわれ、心の帰る着くところといわれてきた。数奇な運命を背負った第五福竜丸、そのエンジンが降り着いたところが熊野の地だ。国道42号線、松林が30キロと続く七里御浜海岸である。

発見後、三重県尾鷲市出身の土井資得さんから、一九九六年、第一回古賀正男記念音楽大賞に入選したという「望郷熊野灘」と題したテープが送られてきた。

生まれ故郷へ帰りたい／敷居が高く帰れない／港恋しい／無沙汰ばかり／母は一人で待っている／夢でもいいたくはない―この歌を聞くたびに、一日も早く船体のそばに運びたいと思う。

何の組織、団体もなくただ一人、当初の目的と展示館への約束を実現したい。展示館の外側にテント張りでもと思えば明日にでも運べる。

しかし、エンジンの保存や、保存を機に、展示館の拡充などの具体的な対応を東京都に求めながら運動を実現するには幾月をようするであろう。資金もなく、多くの団体のみなさんにご援助を受けなければならぬが、アイデアによってカバーできることもありそう。遅くともB29東京夜間大空襲、三月十日の東京都平和の日には再会をきめてほしい。思ったことには不可能はない、ないからできることを信じ、一層みなさんご支援をお願いいたします。(和歌山県海南市)

紀の国での講演会

大石 又七

大阪湾に浮かぶ平らな人口島に、四〇〇トンの巨体が轟音とともに下りる。リムジンバスは降り立つ人々をのみこむようにして、規則正しく走りだす。近代技術のかたまりのような関西空港を後に、バスは三〇分で紀の国、和歌山駅に着いた。

七月十二日、核戦争防止和歌山県医師の会から「ピキニ被爆者として生きる」という記念講演を依頼されていた。会場は八代将軍吉

宗公の城下町、紀の国会館というところだった。土曜日のせいもあってか中学生らしい熱心な女の子や、山の奥から出てきたという中学の先生もいた。先生は私の本を片手にしていた。医師の会の総会後の記念講演で盛況だった。

しかし、全般的にはピキニ事件は知られていないな、というのが私の印象だった。

でも不思議なもので、同じ地域での依頼が続くことが多い。五月



六日にも和歌山市民生協の招きで訪れた。そして八月九日にも、「平和のための戦争展わかやま」に依頼されて講演をする。エンジンも近くの海から引き揚げられた。この際一人でも多くの和歌山の人たちに事件を知ってもらえるよう努力しようと思っている。(第五福竜丸乗組員)



エンジン「よびかけ」団体会議

「第五福竜丸エンジン」を東京・夢の島へ都民運動「よびかけ」団体会議が七月十八日に開かれました。会議には十六団体が参加し、運動目標を確認し、その具体的展開について意見を交換しました(運動目標は前号で紹介したように、船体とエンジンの再会と保存、保存を機に展示館の建て替えなどの対応を東京都に求めていくなど4目標)。

ピキニ事件と第五福竜丸を広く知らせるためのパンフレットの作成や、展示館を訪ねる集いなどの提案もおこなわれ、ひきつぎよびかけ団体の結集をはかり、「都民運動」の結成集会を十月初旬に開くことを確認しました。

静岡市南灘科小学校六年生の修学旅行撮影・高田幹巳さん。

カメラマンとして同行した高田さんは、事件当時、サン写真新聞に報道された福竜丸の写真のいくつかは、私の写真店で現像した記憶があるとなつかしげでした。

村民も笑顔で参加

パグウォッシュで会議四十周年の祝賀会

小川 岩 雄

「核兵器のない世界」をめざす科学者のパグウォッシュ会議(正式の名称は「科学と世界の諸問題に関するパグウォッシュ会議」)は、今年発足四十周年を迎えた。これを祝って去る七月十一日、十二日の両日、この会議が始めて開かれたカナダ東岸(ノバスコシア州)の静かな漁村パグウォッシュで、種々の記念行事が行われた。

この行事には会議の会長でノーベル平和賞受賞者のJ・ロートブラット博士ら十数人の科学者の他に、州知事夫妻や村民も多数参加し、和やかで意義深い交流の場となった。私も数少ない存命の第一回会議参加者の一人として招かれ、現在評議員を務める旧友の小沼通二博士とともに諸行事に出席した。現地は毎日涼しく好天で、美しい風光を満喫できた。

議が核戦争による人類の破滅を警告し、核兵器と戦争の放棄を訴えて一九五五年に発表されたラッセル・アインシュタイン宣言の呼び掛けに改めて開かれることになったことはかなり広く知られているが、この宣言をラッセル卿らに強く促した直接の動機は、他でもないビキニ環礁での米国の水爆実験による第五福竜丸などの被災のニュースであった。実際、宣言は核戦争で全世界に拡がる「死の灰」の脅威を、この事件を引用して強調している。

をこの村に招き、経費の大部分を負担された当地出身の大富豪故サラス・イートン氏に対してであった。氏は深い見識を備えた思索家で、今でも村人の尊敬を集め、氏がたびたび学者を招いた白壁の別荘「考える人の家」は、村のシンボルにまでなっている。氏の遺族も私たちを里帰りした家族のように暖かく迎えてくれた。

を玄関の壁に取り付ける式典が知事とロートブラット博士の手で行われ、私も一言挨拶した。続いて今度はイートン氏のそばの入江沿いの芝生で、四百人近く(村の人口の半分)の村民が子供連れなどで集まって、数年前に火事の一部が焼けたこの建物の再建祝いの集会。村民の協力で見事に復旧した家を眺める人々の表情は喜びに溢れていた。

集会では先ずノバスコシア州ゆかりのスコットランドの古風な衣装を着け、ハイランド笛を吹く楽士を先頭に、知事夫妻やロ博士らが建物を一周してベランダに着席し、英加両国の国歌斉唱の後、昔の貴族の衣装の人物が重々しく巻き物を広げて女王の祝辞を披露した。式の後は一同芝生で歓談、私も皆に次々と握手やサインを求められ、面映ゆさと嬉しさを隠すことができなかった。

翌日帰国の途中、フライとの都合でトロントに一泊した機会に、パグウォッシュ会議で旧知のラポート博士ら三人の学者と会い、大学の研究室で夜遅くまで懇談、旅のよい締めくくりとなった。(立教大学名誉教授・協会理事)

「被害者責任」を考える

加納 実紀代

六月、紫陽花と並んで萩が咲いた。水引き草も赤い穂をつけた。コスモスが咲いたというニュースもあつた。今年は夏がないまま秋になってしまふのかと案じていたら、七月にはいると猛暑になった。しかし気象庁の長期予報では冷夏という。どうやら今年は異常気象らしい。

五二年前の一九四五年もそうだった。冬は長くて夏は遅く、七月下旬になってもうすら寒い日が続いていた。気象庁の梅雨明け宣言はなんと八月二五日、あとで一カ月早めて七月二五日に修正している。敗戦による混乱もあつたらうが、気候まで異常だったのだ。

夏の陽射しが影を刻む境内でしばらく仲よく遊んでいたが、なにかのことでケンカになり、わたしは裏の木原さん宅に行った。ミチコちゃんという女学校一年生のお姉さんがいて、よく遊んでくれていたのだ。ミチコちゃんは勤労動員でいなかったが、木原さんのおばちゃんが家上げてくれた。原爆が投下されたのはその直後である。

ケンカ別れしたあとも彼は神社で遊んでいて、原爆の熱線を浴びたのだ。ミチコちゃんも死んだ。彼女は強制疎開の作業中に被爆、自力で帰ってきたものの翌々日の朝、茶色いドッジボールのように顔が膨れ上がって死んでいった。二人とも大人が始めた戦争の中で育ち、甘なお菓子はおろか白い御飯もろくに食べられないままだった。もちろんテレビも知らなければ飛行機に乗るなど思いもよらなかつた。科学技術の恩恵をなら受けることなく、いきなり核という最先端の科学技術によって殺されてしまったのだ。あのときケンカしなれば、それはわたし自身の運命でもあつたはずだ。

い込まれてしまったのだ。原爆投下は米兵五〇万の生命を救った、軍国主義日本を壊滅させ、アジアを解放した。これがそれまでのアメリカの原爆投下に対する一般認識だった。スミソニアンの企画はそれを異化するものだった。しかし、じつは原爆投下の直後にはアメリカ国民の間にも批判の声が上がっていたのだ。『ニューヨーク・タイムズ』には「原子爆弾は我が国歴史の汚点になるものである」「これは集団的殺戮、全くのテロ行為だ」といった投書が載っている。こうした人間としてあたりまえの声に耳をふさぎ、核開発競争に狂奔した戦後五〇年。スミソニアンの展示はそれを問い直す試みでもあつたが、アメリカはふたたび耳をふさいだことになつた。

(女性史研究家)